

がん治療薬に関わる基礎研究から、医療系コンサルティングへー前田里菜さんー



丁寧にインタビューに答えてくださった
前田里菜さん=Zoom画面のキャプチャ

2020年度に学位を取得し、総合生存学館を修了した前田里菜さん。就職先は、外資系のPwCコンサルティング合同会社。製薬企業や医療機器の会社を顧客とするヘルスケアの部署で仕事をしている。就職活動もコンサルティング業界に絞っていたという。だが、大学院での研究テーマは、がん治療薬を目指した化合物の合成と評価だった。同志社大学理工学部の際にがんの治療に関わる化合物の合成を経験し、興味を持ったテーマを追求しようとしていた。

「思修館に入ったタイミングでは、卒業後も研究者としてずっと研究を続けるつもりだったんです」。転機が訪れたのは、2年次の海外サービスマンシップだった。約3週間ミャンマーの村に入って調査をするなかで、発展途上国の実情を目の当たりにした。「生活の様子や保険制度が整っていない様子を見たときに、もちろん基礎研究って大事なんですけど、私がやっている治療薬を開発する基礎研究と社会との間に大きなギャップがあるなと思って、基礎研究の実装化に興味を持つようになりました」。

そこから実装化に関わることを少しずつ調べながらも、研究委託の制度を利用して理学研究科で取り組んでいた基礎研究でも成果を出していった。3年次に1本目の原著論文を出し、次の実験も進めた。4年次の海外武者修行を挟み、5年次に2本目の原著論文に加え、レビュー論文も発表した。海外武者修行から帰国した3月から6月までは就職活動に時間を割き、さらに5年次にはProject Based Research (PBR) も実施したというので、ハイペースに論文を出していたとも思えるが、本人は「理学研究科の研究室の同期だと倍くらい出していました」と謙虚だ。総合生存学館の要求はジャーナルペーパー1本ですよと尋ねると、「分野によって論文の出しやすさって全然違うんですよ。人文学系だと論文を出すまですごく時間がかかるので、基準が1本になってると思うんです」と他分野の状況もよく理解している。

実装化に携わる最初のチャンスは、4年次の海外武者修行で掴んだ。文科省の「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」に採用され、イギリスのケンブリッジにあるヘルスケア系のコンサルティング企業で約1年間のインターンシップを経験した。その内容については、すでに前田さんがレポートしている【レポート 2019年度武者修行(4)】。5年次のPBRでは、ヘルスケア業界に役立つことをしたいと、関係者へのヒアリングを実施したうえで、医療従事者や医療系ベンチャー企業をつなぐオンラインのプラットフォームの構築に取り組んだ。大掛かりなプロジェクトではなかったが、手作りでホームページを作成し、今後も続けていきたい活動の足がかりを作ることができた。

研究の世界から、実装化の世界へ。新しい挑戦に飛び込む素地は、前田さんが総合生存学館を志望した動機にすでに見られる。「せっかく大学院に行くのであれば、いろんな人が集まっている場所に行きたいなと思って。いろんな分野の学生さんや先生がいて、学術の分野だけじゃなくて、いろんな人に出会える場所は面白そうだなって総合生存学館を選びました」。

大学院のカリキュラムはそんな期待に応えるものだった。総合生存学館や理学研究科でさまざまな分野の講義を受け、1年次の熟議では14名、より時間をかけて行う2年次の熟議では2名の学外講師に出会い、各講師が出したテーマに沿ってレポートを書いた。2年次の海外サービスラーニングでは、同期全員で前期に週1回のペースで事前研修講義を受け、夏季休暇中に調査を行い、最終報告会で発表した。指導は3人体制で、研究は理学研究科の指導委託教員に、海外武者修行やPBRなどは総合生存学館の指導教員とメンターの教員に相談したという。

前田さんは理学研究科の研究室で過ごした時間が長かったが、海外渡航中を除く4年間の日常生活を送った研究施設では、ラウンジなどで他の学生と交流できたのもよいところだったと感じている。「生き方が自由な人がいるので、すごく面白いですね」。修了生の進路も、企業に就職する人、アカデミアに残る人、官公庁にいく人とそれぞれだった。

学術研究を行い、博士論文を完成させるという大学院における一般的なハードルに加え、サービスラーニング、海外武者修行、PBRなどまで要求する総合生存学館のカリキュラムはゆとりがないようにも思える。しかし、総合生存学館の良さとして、前田さんから意外にも「自由」という言葉がでてきた。どういうことか尋ねると、「海外武者修行先にしても、PBRにしても、自分がやりたいことを自由に決めて、それを先生方がサポートしてくださった」。

提供された機会をしっかりと捉えて視野を広げ、専門の研究はもちろん、海外武者修行やPBRでも自分で何をすべきか決定し、実行してきた前田さん。これからは医療分野の基礎研究を社会に届けるプロセスの一端を担うプロフェッショナルとして活躍する。

聞き手 小泉都、2021年8月12日インタビュー